

より良く生きる ― 出居清太郎先生の世界 ― 第27回

山 本 博 也

「二つ一つ」の世界観（その3）

恩人と仇とは裏と表である。二つであつて一つである。難が有つて有難い、これもまた表裏の関係にある。二つで一つである。

（出居清太郎先生のことばから）

（1）難有つて、有難し

人生行路における「難」は苦しく辛いものでありますが、その「難」によつて力をつけていただくのであります。いかなる「難」をも克服していけば、結果として「有難い」ことになってまいります。ですから「有難い」という文字は「難有り」と書くのであります。難有つて有難い、文字通りであります。

■物事には裏も表もある

国民的なコメディアンであるHさん、中学生の頃父親の事業がダメになり、借金取りが家に押しかけてくるようになったそうです。それで学校はあきらめて劇場の仕事について、その後コメディアンになって成功した。そのことをふりかえつてHさんは次のように言っています。

借金取りのおかげだよ。あの時は悔しくて泣いたし、不幸だと思ったけど、人生って不幸が不幸では終わらないね、借金取りだって恩人だよ、と。

劣悪な環境や不利な条件が自分を鍛えてくれたという話もよく聞きます。自分の前に何かの壁があつて、それを乗り越えようと努力したことで自分が成長できた、という経験をもっている人は多いと思います。

たしかに難有って有難しだと言えます。ただそうなるまでには努力と時間が必要です。難に遭った当座はやはり苦しいものです。その時に、「二つ一つ」の世界観に立って、すべて物事には裏と表がある、この事態は私に苦しみを与える面ばかりでなく、喜びを与えてくれる面も持つて

いるのだと思えば、難に立ち向かう勇気が出ます。やがて難に感謝ができるようになるでしょう。

もともと出来事それ自体は、光でもなく、影でもなく、私たちの受け取り方次第で光にもなり、影にもなるものなのかもしれません。

(2) 合わせ鏡

他人の欠点が心にかかる間は、その欠



カラスノエンドウ 大西 恵

点はわれにもあると心得ねばならないのであります。自己の足りないところを、他人が、足りないこととして見せてくださいます。

そこで、「世の中は合わせ鏡でわがことを人が真似して教え示せり」と教えてあるでしょう。相手の言語動作をあれこれと批判しないで、合わせ鏡として自分の心を見る稽古をしてください。

(3) 言うことをきかない

私たちは毎日のように経験しております。「なぜこの人は言うことを聞かないのだろう」「なぜわからないのだろう」と。それは、自分自身に、聞かないところがあるからであります。自分自身に知識の足りないところ、徳の足りないところ、

不平不満の浄化できないところがある、それを教えてくださっていることに気がつかない。

(出居清太郎先生のことばから)

■相手は自分を映す鏡

自分が見ている相手は、自分を映している鏡だと見る——そうすると相手と自分(二人)は一人だということになります。つまり「二つ一つ」の世界観の適用の一つとなります。

相手が自分に不平不満をぶつけてくる——それは私が相手に対して不平不満を持っていることを映し出している、相手が私の価値観を否定し、自分の価値観を押し付けてくる——それは私が相手にそうしているところがあることを映し出してい

る、ということになります。

たしかにこちらが明るく「こんにちは」と声をかければ、相手にもこやかに応対してくれることは誰もが経験していることでしょう。もし、こちらが親しげに声をかけても、つつけんどんな対応をされたときは、私がまだ十分心を開いていないのだと反省すればいいわけです。相手の態度を批判しても私には何の益もありません。自分を省みて反省すべきことが見つければそれは私にとってたいへん有益なことになります。

世界を見ればロシアとウクライナ、イスラエルとハマス、国内では与党と野党、政党と政党、身近なところでも親と子、夫と妻、上司と部下、お互いに相手が「言うことを聞かない」と言い合っています。

「言うことを聞かない」合わせ鏡のオンパレードです。アメリカが仲介役を買って出ましたが、ロシアとの間で「言うことを聞かせよう」合わせ鏡になっていいますので、解決の見通しは全く立たないように思えます。

私たちの身近な世界でも、「言うことを聞かない」合わせ鏡、「言うことを聞かせよう」合わせ鏡になっている場合が多いのではないのでしょうか。そのことに双方が気がつけばよいのですが、まずは気がついた方から自己を省みることが第一歩でしょう。私が変われば、相手と私は「二つ一つ」なのですから、相手も変わってくるに違いないのですから。